



玉類生産と流通の問題点 福井県出土資料を題材として

浅野 良治（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）

今回の報告では、県内の玉類生産遺跡（玉作遺跡）と消費遺跡（墳墓）の様相を併せて提示することにより、玉類生産の契機と製品の流通について述べた。対象とした時代は弥生時代である。

生産遺跡の様相

県内では弥生時代中期初頭より古墳時代前期にかけて玉作遺跡が存在する。弥生時代中期後半から後期前半に属する玉作遺跡は確認出来ていないが、この時期は遺跡が希薄な時期であり、玉作が行われていたかどうかは、今後の発掘調査によって明らかになるであろう。

長期にわたって生産を継続した遺跡は皆無で、規模の多寡にかかわらず、一時期に集中して生産を行った可能性が高い。また、比較的大規模な生産を行った玉作遺跡では、未成品の他、製品も大量に出土する。なお、残された製品に法量の規格性は認められない。

消費遺跡の様相

県内では、玉類を大量に持つ墳墓が数例確認されている。碧玉製管玉の出土総数は1000本に迫る数である。また、遺跡ごとに長さ・直径がある程度揃っており、法量に規格性を持つと言えよう。

肉眼観察によると、これらの管玉は、県内の玉作遺跡から持ち込まれた可能性が高いものがある。それが福井市原目山1号墓で出土した323本の管玉で、近在の玉作遺跡・林・藤島遺跡の資料と酷似している。

まとめ

墳墓出土管玉は法量・質感が揃っている。一つの生産地から選択して持ち込んでいると考える。

また、管玉は1本1本で「製品」となるのではなく、連にした時点で初めて「製品」となった可能性が高い。

生産遺跡における存続期間の短さと、出土遺物の中に大量の製品が存在することから、恒常的な交換を第一目的とするものではなかったと考えたい。では、玉類を生産した第一目的は何だったのか。それは、集落リーダーの要求・要請によって生産されたという仮説を提示したい。

県内の消費遺跡より出土した管玉は、法量に規格性を持ち、1墳墓に大量に持つ例が多い。被葬者の要求を満たした時点で生産は停止し、その結果生産遺跡には未成品に混じって、選ばれなかつた製品が出土するのだと考えたい。

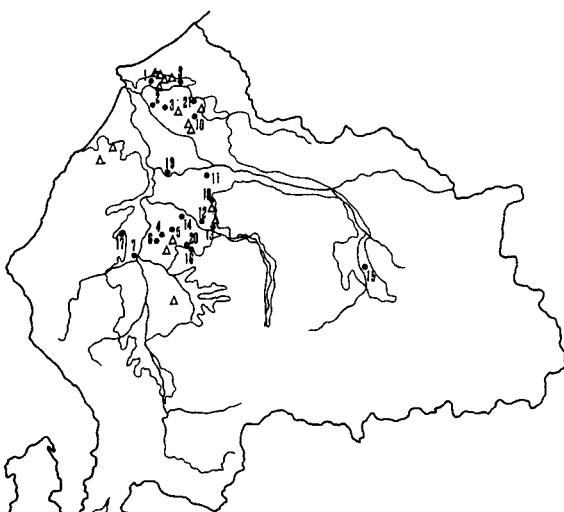
集落リーダーが玉をどのように使ったか。現時点では、他地域への贈答品・交換材としての使用数以上に、相当数が自分や近親者の身を飾るために使われたであろう、と言う他ない。いずれにせよ他地域へ流通する前に生産された玉類が一度リーダーの手に渡ったことが重要であり、玉の流通はリーダーの手を介して行われたのであろう。

おわりに

この会の準備期間は、私にとって、とても楽しい時間でした。このような機会を与えてくださった石川県埋蔵文化財センタ - の皆様に感謝致します。また、富山正明氏・宮田明氏からは、沢山の助言を頂きました。誠にありがとうございました。

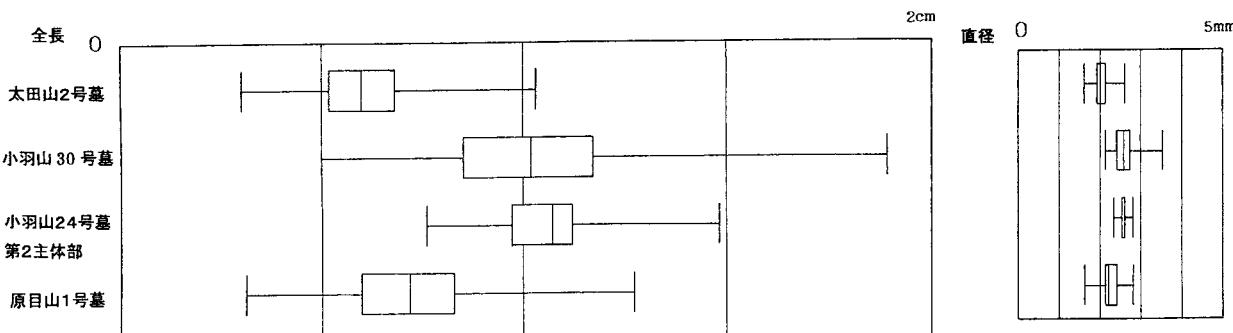
福井県の玉類生産遺跡と玉類出土墳墓

時期	中期			後期			古墳 前期
	前葉	中葉	後葉	前半	後半	終末期	
瓶谷	→						
今市岩畠	→						
下屋敷	→					
林藤島				→		
右近次郎					→		
中角		→			→	
伊井					→	
河和田					→	



主な玉類生産遺跡の消長表

- | | | |
|------------|--------------|------------|
| 1. 加戸下屋敷遺跡 | 9. 茉山崎遺跡 | 17. 小羽山墳墓群 |
| 2. 東荒井遺跡 | 10. 河和田遺跡 | 18. 原目山墳墓群 |
| 3. 坂井兵庫遺跡群 | 11. 林藤島遺跡 | 19. 中角遺跡 |
| 4. 今市岩畠遺跡 | 12. 和田神明遺跡 | 20. 黄瀬遺跡 |
| 5. 下筋田高群遺跡 | 13. 荒木遺跡 | 21. 伊井遺跡 |
| 6. 安保山遺跡 | 14. 木田遺跡 | |
| 7. 瓶谷在谷遺跡 | 15. 右近次郎西川遺跡 | |
| 8. 吉河遺跡 | 16. 太田山墳墓群 | |



墳墓出土管玉法量ヒストグラム



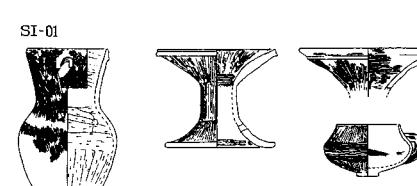
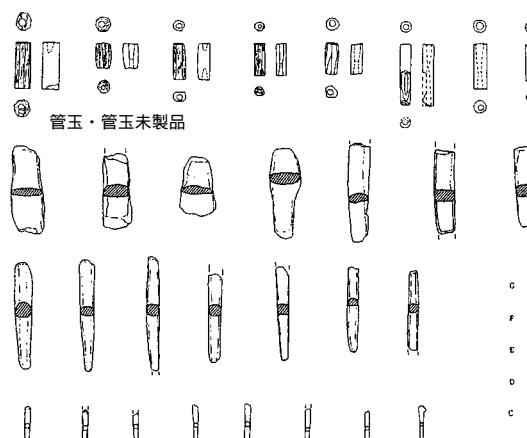
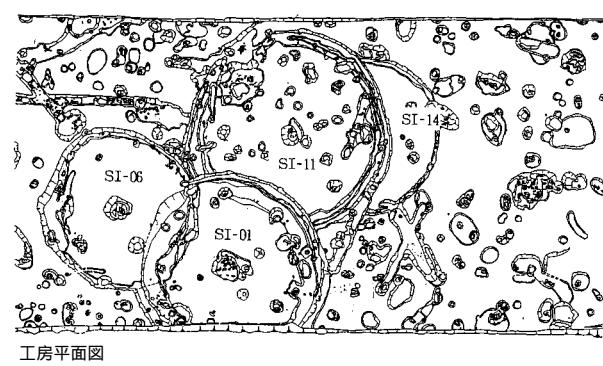
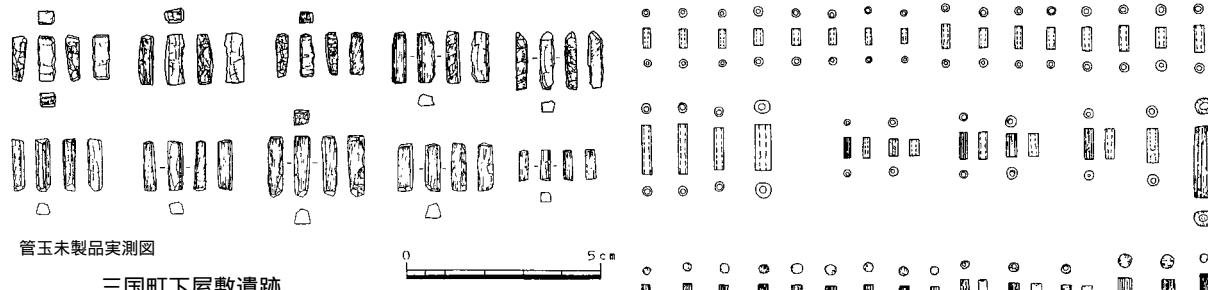
清水町瓶谷在田遺跡



福井市今市岩畠遺跡

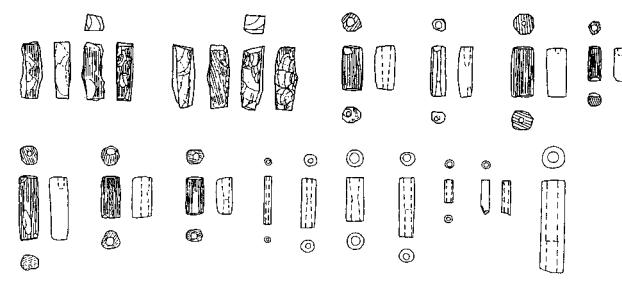
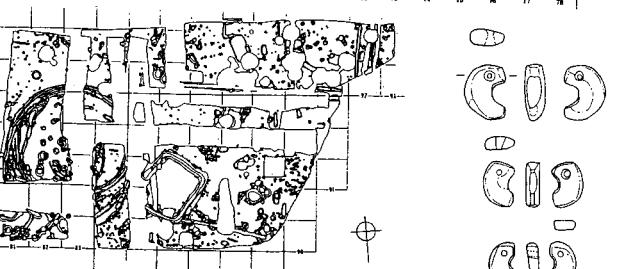
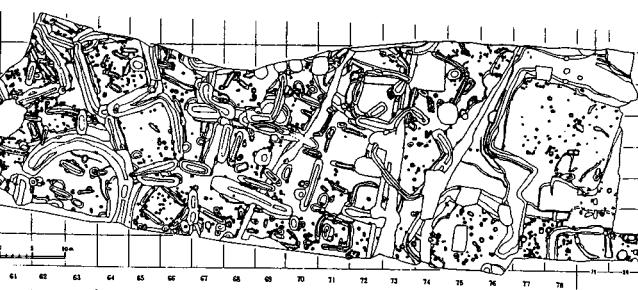
北陸の管玉模式図





S = 1 / 12

福井市林・藤島遺跡



福井市中角遺跡